

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2013～2016

課題番号：25257008

研究課題名(和文)ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究

研究課題名(英文)Research in the Origin and Characteristics of Judeo-Islamic Monotheism in the History of Civilization

研究代表者

市川 裕 (Ichikawa, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：20223084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,800,000円

研究成果の概要(和文)：ユダヤ教の歴史を調べていくと、のちに出現する二つの一神教、キリスト教とイスラーム、を生み出す基盤になっていることがわかる。宗教学の歴史は信仰を基盤とする西欧のキリスト教を宗教の一般モデルとしたため、このモデルから外れる諸要素は関心から外れた。しかし、イスラームとラビ・ユダヤ教はそれぞれ、シャリーアとハラハーを特徴とする啓示法の宗教であり、預言者に啓示された神の意志は、日常生活の行動様式を詳細に規定している。これら一神教の二つの異なる類型がともに古代ユダヤ社会に起源を有することを示して、一神教の歴史全体を動的に理解する道筋を示すことは、人類の宗教史を考察する上で文明的意義を持つものである。

研究成果の概要(英文)：Our engagement in a historical inquiry into ancient Judaism allows us to better understand the historical dynamics of all major monotheisms including Christianity and Islam, especially with particular attention to their basic, structural differences. Historically the study of religion, whose theoretical model is mainly based on Western Christianity, has paid its significant attention to faith as an only essential component that could define every religious phenomenon. However, this perspective is one-sided in examining the history of monotheism. Rabbinic Judaism and Islam, characterized primarily by halakha and Sharia respectively, are understood as religions founded on divine law, whose inquiry must not only make this fact known but also be unique enough to demonstrate that the very origin of these two types of monotheism is in fact traced back to ancient Jewish society and its legal tradition, which helps set forth a path to dynamically understanding the entire history of monotheism.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教史学 考古学 イスラーム学 聖書学 一神教 法と宗教 国家と宗教

1. 研究開始当初の背景

イスラエルにおける日本隊の発掘調査は、ガリラヤのテル・レヘシュという大型遺跡に転じ成果をあげていた。この遺跡の最上層部は、ローマ時代のユダヤ教徒の集落の特徴を示すことが知られ、一神教の世界宗教史を構想するにはこれ以上はない環境であった。

2. 研究の目的

3つの唯一神教 ユダヤ教、キリスト教、イスラーム は、その国家宗教関係に着目するとき、キリスト教が国家と教会の二元的支配構造を持つものに対して、ユダヤ・イスラームは啓示法に基づく政教一致の支配構造を持つという点で大きな基本的相違がある。その起源を遡るとき、古代ユダヤ社会においてキリスト教とラビ・ユダヤ教が分離、成立する時代に行き着く。異邦人キリスト教は、ローマ世界において信仰共同体として根付いていくのに対して、ラビ・ユダヤ教は西暦3世紀初頭にハラハー（ユダヤ啓示法）の宗教として再生した。ヘレニズム・ローマ世界を背景に登場した一神教の2つの共同体の成立を分析し、その特徴を、背景の宗教文化に照らして二つの異なる類型として把握し、一神教の二つの流れの歴史動態の起源と特性を思想的、歴史的、考古学的に論証することが可能である。これによって、これまで注目されなかったユダヤ教のハラハーからイスラームのシャリーアへの啓示法の発展という一神教の流れが明確に把握できるようになる。

3. 研究の方法

時代と対象と研究方法の特性にしたがって、3つの異なる研究グループを立ち上げ、分担者同士の話し合いにより全体的な研究構想をより精緻にする。

研究班A「法と宗教グループ」は、古代ローマ時代のユダヤ社会における「法の宗教」と「信仰の宗教」の成立史に焦点を当てて、一神教の登場による古代国家の枠組みの変容を分析する。問題の焦点は、古代ユダヤ社会とローマ帝国との2度の戦争を経て、社会体制が大きく変容する中で、異邦人キリスト教とラビ・ユダヤ教の双方が、ローマ帝国の

法制度とどういう関係を築いたかである。

研究班B「宗教文化グループ」は、日常生活に及ぼす宗教的要素の拡大と世界観の都市構造への反映に焦点を当てて、一神教の規範拘束力の日常生活への浸透の度合いを解明する。ラビの影響力の増大で、ユダヤ人の日常生活にどの程度戒律が浸透していったかを、宗教史と考古学の視点から分析する。

研究班C「一神教と社会グループ」は、イスラーム統治下における一神教共同体の相互関係に焦点を当て、啓示法体系を持つイスラームが既存の一神教共同体を統治する仕組みの生成と発展を考察する。ラビ・ユダヤ教とイスラームの啓示法体制の類似性がどのように生成したかが大きな焦点となる。

4. 研究成果

全体の成果を7項目に分けたものを示す。そのあとに、年度ごとの研究成果を提示する。

一神教の世界宗教史の構想に当たっては、日本の高校世界史が古代ユダヤ教をキリスト教前史とのみ位置付ける記述の偏りをただす必要があることが確認できた。

一神教の二つのタイプを明確に類型分けすることにより、ユダヤ教からイスラームへの展開が、啓示法の宗教として明確に識別できることがわかった。これをセム的一神教の特徴とすると、キリスト教がどういう一神教なのかという新たな問いが生まれる。

テル・レヘシュ遺跡から1世紀後半のシナゴグ遺跡が発掘され、研究協力者のM・アヴィアム氏によってシナゴグと同定された。矩形のシナゴグを起点とし、神殿崩壊後に発展するユダヤ教シナゴグとキリスト教会がともに聖所を建築構造に組み込んでいく歴史的展開が考古学的に実証できる。

ヘレニズム・ローマ時代には、ユダヤ教の生活規則、特に偶像崇拜禁止と穢れの概念が日常生活に影響したことが、ヘロデ式ランプ、石製の容器、食器の蓋等の分析で実証できた。

ユダヤ教がラビ主導の啓示法の宗教に発展する歴史的契機として、3世紀前半におけるローマ市民権法と200年頃のミシュナ編纂との同時代性が焦点となる。ローマ法の普遍

法化とユダヤ法のエトノス法化である。キリスト教は市民権の普遍化の中で拡大する。

2～3世紀ローマ帝国における一神教の発展を理解する上で、各宗教の担い手となる知識層への着目が必要である。この時代に5人のローマ法学者が輩出するが、ユダヤ教では律法学者としてのラビが西暦70～200年に輩出し、キリスト教会では、教父と呼ばれる知識層が信仰の弁明に登場する点で、二つの宗教の相互の特徴が浮き彫りになる。

イスラームが先行する啓典の民を許容する理論構成においてユダヤ教の果たした役割が注目されるが、実際の歴史資料の不在から歴史的因果関係の解明には困難が伴う。他方、イスラームにおける法学の発展は、ラビ・ユダヤ教の全ユダヤ社会への普及に与って力があつたことが、歴史的に証明される。

2013年度

本研究は12名の研究分担者と10名余の研究協力者に支えられた、複数のディシプリンをもつ総合的学際的な研究である。したがって、当初より、3つの研究グループを設定して、機能的かつ体系的に研究課題を遂行することを大きな目標として掲げてきた。初年度末の2日間に研究会合を開催し、各自の個別研究の全体を俯瞰した(URL参照)。その結果、当初構想していた研究班に修正を施し全体をより体系的に把握できることが分かった。

2014年度

(1) 概要：この年度からの3年間は、年度末に国際シンポジウムを開催することを目標に定めた。今年度は、翌年の国際宗教史学会でのパネル参加を視野に入れた準備が必要と考え、研究班Aのテーマの共同研究を目標として、発表の場を2回持った。第1は9月開催の日本宗教学会で、「古代ローマ帝国と諸民族の宗教」をテーマにパネル参加した。第2に、それを基に、年度末に古代ローマ史の研究者I・ゲンチェヴァ・ミカミ氏を加えた国際シンポジウムを開催し、ユダヤ教・キリスト教・異教の宗教状況を議論した。

(2) 日本宗教学会学術大会パネル「古代ローマ帝国における諸民族と宗教」(於同志社

大学)の成果：一神教の二つの流れを古代ローマ帝国との関係で理解することを目指し、5名の研究発表を行い4つの論点を得た。

キリスト教とユダヤ教を神学的な対立関係において見るだけでなく、ローマ社会にインパクトを与えた一神教的生活倫理としての共通性にも着目すべきことを痛感した。都市の商業網の高度な発達を社会的背景として貧民救済を掲げた普遍主義的宗教、個人を改宗させる自己定義的宗教を指摘できる。この傾向はササン朝ペルシアでも促進され、イスラームへと展開する点が重要である。

ローマ社会の公的宗教をどう理解するか。ローマ神官団が職業的な世襲集団ではなく元老院議員などからの任命に拠ったということは、制度的側面で見れば、キリスト教の聖職者が国教化の際に公的権威を奪取しやすかった最大の要因といえるが、ユリアヌスの改革に見られる伝統的祭儀としての犠牲祭への根強い宗教意識に対して、十分な研究上の配慮が必要である。キリスト教の国教化とはどういう事態を指すのかを概念的に明確にすることも課題である。

試みとして法と宗教の關係に注目すると比較が容易になるという点が重要である。法制度の違いは、近現代イスラーム社会にまで及んでおり、宗教文化の特徴を理解するうえで不可欠の要素である。啓示法による宗教共同体を形成するユダヤ法が、ローマ帝国内で並行して発展する意義を精緻にしたい。

ヘレニズムが大いに栄えた帝国東部地域、後のビザンツ帝国へと発展する地域を、個別に特徴づける余裕がなかったが、東方キリスト教の諸派が発展する地域であり、その傾向はササン朝にまで及ぶため、イスラームへの継承の観点から、さらなる考察が求められる。

2015年度

(1) 概要：若手研究者で組織した事務局体制が軌道に乗ってきた。全体計画の立案には普段から意見を交わすことのできる場の必要性が痛感されたが、この体制が整ったことにより、単に個別研究を寄せ集めるだけではなく、科研の主旨である共同研究をいっそう

促進することができた。

(2) 8月のドイツ、エアフルト大学で開催された国際宗教学宗教史学会 IAHR におけるパネル参加と1名のポスター発表が実施された。パネル発表では、ローマ帝国の宗教と一神教の違いが最も鮮明に現れる動物供犠に注目して、一神教が古代の宗教意識の変化をもたらした点を明らかにした。

(3) 年度末の国際シンポジウムでは、中世イスラーム社会の諸宗教を扱う格好の事例として、「カイロ・ゲニザ文書」の専門家アミール・アシュル氏を招聘し、バビロン捕囚時代の碑文資料研究と組み合わせた。研究課題は、「ユダヤ的共同体の萌芽と中世における展開：一次史料による比較」である。この試みは、ユダヤ教の啓示法成立以前と以後で、ユダヤ人の共同体性には違いがあるか否か、という問題意識に裏打ちされたものである。

アシュル氏のコメンテータとして、日本側から、中世エジプトのイスラーム史とコプト教の研究者2名に依頼したことで、日常生活における3つの宗教の相互影響を婚姻制度について確認することができた。ゲニザ文書はユダヤ教徒の文書史料だが、他の一神教に関する研究者も注目している重要な文書であり、今後の共同研究が待たれる分野であることが再確認できた。

2016年度

(1) 概要：最終年度は二つの目標を設定した。日本宗教学会学術大会へのパネル参加と年度末2017年1月29日の国際シンポジウムである。最終回のテーマは、研究班Bの「宗教文化」を主題として、宗教意識の日常生活への浸透という、「ものとアイデア」のかかわりを問うことであり、日本隊と共にガリラヤの発掘調査に参加しているイスラエルの考古学者モルデハイ・アヴィアム氏を招聘しての試みであった。テーマは、「イエス時代のユダヤ共同体における宗教的要素と物質的要素」である。

(2) 2016年8月に、西暦1世紀のイエス時代のガリラヤのシナゴグ跡が発見され、調査に参加したアヴィアム氏らによってシナ

ゴグと同定されたことは、招聘に花を添えた感があり、この発掘の成果を盛り込んで、エルサレム第二神殿時代末期におけるシナゴグの意義についての講演が実現したことは実に喜ばしいことであった。日本側からは、江添誠氏と牧野久実氏によって、それぞれ、都市の貨幣に描かれた神像の意義、および、宗教観念の日常生活への浸透について、論じてもらった。

(3) 2016年12月8日には、天理大学の桑原久男氏を中心に、2016年度までの発掘成果を公式に記者発表し、西暦1世紀のイエス時代のガリラヤのシナゴグ跡の発見が、翌日の新聞紙上で周知された。また、12月17日には、同じく天理大学において、科研成果公開促進シンポジウム「イエス時代のガリラヤ地方と一神教の系譜を探る」が開催され、本科研の成果であるシナゴグの発見の意義を中心に研究の意義が公開された。

(4) 日本宗教学会学術大会パネル発表(代表:市川裕。2016年9月早稲田大学。パネル「唯一神教の世界宗教史再考」)の成果。

本パネルの目論見は、二点あった。第一は、一神教の歴史の中で、セム的一神教の本流ともいべき流れを確認すること、であった。ラビ・ユダヤ教とイスラームがともに、啓示法の宗教を発展、確立させたことに鑑みて、両者の一神教を宗教学における一神教のタイプとして明確に概念化することの必要性を訴えることを課題としたといっていよい。このタイプの一神教がイスラーム世界を形成したことによって、種々の一神教社会が啓典の民、ズィンミーとして、自治社会としての存立が許され、生命・財産が法的に保護されたことは、中世から近世にわたって、西アジアの歴史を特徴づけるものとなった。本パネルでは、そのような啓典の民の存在を容認する歴史的因果関係がどのようにして生じたかについて、嶋田氏がムハンマドとメディナのユダヤ教徒との関係に焦点を当ててその解明を試みた。イスラームとユダヤ教との関係の理解にとって第一次史料の不足が大きな障害となることがわかった。その中で、

十一世紀から十三世紀の第一次史料として、カイロのゲニザ文書の意義が改めて確認されたように思われる。

第二は、異教の一神教もあることから、多神教を捉え直すことである。従来、一神教といえばキリスト教を念頭に置いてきた宗教学に対して、セム的一神教の啓示法体制を一つの典型としたとき、キリスト教という一神教はどのようなタイプの宗教なのかを改めて問い直すことを要請する。これは実は今日の西洋思想にまで射程をもつヘライズムとヘレニズムの葛藤の問題でもあるが、本パネルにおいてはあくまで宗教史の視点からのアプローチを試みたものである。

コメンテータを含む三人の論者により、それぞれに異なる視点からの分析が試みられた。土居氏が初期キリスト教の展開に焦点を当てて考察し、初期キリスト教内部に戒律重視のグループとそうでないグループの対立が生じていたことを指摘した。トーラーの戒律を伴った一神教の展開が、異教世界では困難だったことがすでに当初から判明した形になっている。

異教世界に進出する一神教は、どうすれば異教世界に浸透できたのか。その際の葛藤とは何だったのか。この難問に古代ローマ宗教史の観点から取り組んだのが中西氏の論考である。キリスト教寛容令に続いて「国教化」が起こり、異教祭儀の禁止へと発展することの不可避性は、キリスト教の排他性にのみ帰せられない。後期ローマ帝国において一つの宗教史を描くことがいかに困難かということがこの論考で明らかになるが、では我々はこれにどう向き合えばよいのか。

葛西氏がこの問いに、西洋古典学とローマ法研究の立場から提起したのが、多神教概念の再考察という課題だった。ここでいう多神教とは、宗教学の広義の概念ではない。ギリシア、ローマというそれぞれに固有の社会と思想を生み出した文化的総体を包括する呼び名としての多神教世界である。特にローマでは、ローマ法の高度な発展によって、法と宗教、世俗と宗教の領域が截然と区分された

文化があり、宗教が果たしてきた社会的思想的役割への視点の喚起である。ある種の宗教に対して多神教は極めて不寛容である、という指摘は本テーマの核心を衝いている。多神教社会同士には、ゼウスとユピテルが同じ神として崇められるような共益可能性が認められるのに対し、それを許さない宗教に対する不寛容である。また、西ローマの滅亡を、西のキリスト教が自らのIDに向き合う歴史的苦難として把握する視点のあることをフロアーとのやり取りで教えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 41 件)

1.市川 裕(査読無)「一神教の世界宗教史再考」、日本宗教学会学術大会パネル、代表市川裕他4名『宗教研究』90号別冊、2017.3、53-59頁。

2.市川 裕「神殿供犠から啓示法へ 一神教の歴史におけるラビ・ユダヤ教の意義」『東京大学 宗教学年報』XXXI、2015.3.1-19頁、(査読無)。讃辞つき。

3.市川 裕「タルムードの聖書解釈に込められたユダヤ賢者の実存的関心」『京都ユダヤ思想 特集号 レヴィナス哲学とユダヤ思想』京都ユダヤ思想学会編、33-52頁、2015.3。(査読有)

4. HASEGAWA, Shuichi and PAZ, Yitzhak, "Tel Rekhes 2013: Preliminary Report", *Hadashot Arkheologiyot* 127(2015) (査読無) (Web 出版:

http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=24892&mag_id=122).

5.市川 裕(査読有)「ユダヤ賢者における「神の国」の観念」『聖書学論集 46 聖書の宗教とその周辺』日本聖書学研究所、リトン 2014.9、195-214頁。

[学会発表](計 28 件)

1.市川 裕(パネル代表)「唯一神教の世界宗教史再考」日本宗教学会第75回学術大会、2016年9月11日、早稲田大学(東京都、新宿区)。

2. ICHIKAWA, Hiroshi (Panel Chair,

“Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitutions” (第 21 回国際宗教学宗教学史学会、パネル発表 4 名。2015 年 8 月 28 日、ドイツ、エアフルト)

3. MAKINO, Kumi, "Lids and the Jewish dietary purification in ancient Palestine" 2015.8.22 ~ 8.29, XXIth IAHR World Congress. Erfurt, Germany.

4. 月本 昭男・市川 裕・長谷川 修一・小野塚卓造「物質文化からみた形成期のユダヤ教共同体と鉄器時代末期の大型複合建築物(テル・レヘシュ第 7 次発掘調査報告)」オリエント学会ポスター発表、2013.10.26 - 27. 日本オリエント学会第 55 回大会、於 京都外国語大学(京都府・京都)。

[図書](計 21 件)

1. 江添 誠「ローマ帝国東方属州におけるコインの政治的・経済的役割」豊田浩志編『モノとヒトの新史料学』勉誠出版、2016、126-143。

2. 中西 恭子『ユリアヌスの信仰世界 万華鏡のなかの哲人皇帝』慶應義塾大学出版会。2016、277

3. 市川 裕編著『図説ユダヤ教の歴史』河出書房新社(フクロウの本シリーズ)執筆担当: 第 1, 2, 6, 7 章他、2015.3。131 頁。

4. 嶋田 英晴『ユダヤ教徒に見る生き残り戦略』、晃洋書房、2015、183。

5. 桑原 久男「考古学から見た都市の形成と展開」、長谷川修一編『考古学からみた聖書の世界』、聖公会出版、2014、pp1-20

6. 高橋 英海「ユーラシアの知の伝達におけるシリア語の役割」、堀川徹編著『知の継承と展開 イスラームの東と西』(シリーズ知のユーラシア 2)、明治書院、2014 年、15-44。

7. 山野貴彦(査読無)「新約時代におけるパレスチナのシナゴグ」(長谷川修一編『考古学からみた聖書の世界』、聖公会出版、2014 年。227 - 258。

[その他] ホームページ等

(1) 市川科研ウェブサイト

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/ichikawakaken/index.html>

(2) テル・レヘシュ発掘調査団公式ブログ
<http://rekhesh.sblo.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 裕 (ICHIKAWA, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号: 20223084

(2) 研究分担者

佐藤 研 (SATO, Migaku)

立教大学・文学部・名誉教授

研究者番号: 00187238

葛西 康徳 (KASAI, Yasunori)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号: 80114437

細田 あや子 (HOSODA, Ayako)

新潟大学・人文学部・教授

研究者番号: 00323949

月本 昭男 (TSUKUMOTO, Akio)

上智大学・神学部・特任教授

研究者番号: 10147928

牧野 久実 (MAKINO, Kumi)

鎌倉女子大学・教授

研究者番号: 90212208

桑原 久男 (KUWABARA, Hisao)

天理大学・文学部・教授

研究者番号: 00234633

長谷川 修一 (HASEGAWA, Shuichi)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号: 70624609

高橋 英海 (TAKAHASHI, Hidemi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 20349228

菊地 達也 (KIKUCHI, Tatsuya)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号: 40383385

江添 誠 (EZOE, Makoto)

慶應義塾大学・文学部・非常勤講師

研究者番号: 80610287

高井 啓介 (TAKAI, Keisuke)

東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員

研究者番号: 00573453

小堀 馨子 (KOBORI, Keiko)

帝京科学大学・生命環境学部・准教授

研究者番号: 00755811

(平成 27 年度より研究分担者)

(3) 連携研究者

鎌田 繁 (KAMADA, Shigeru)

東京大学・東洋文化研究所・名誉教授

研究者番号: 70152840

(4) 研究協力者

中西 恭子 (NAMANISHI, Kyoko)

土居 由美 (DOI, Yumi)

嶋田 英晴 (SHIMADA, Hideharu)

志田 雅宏 (SHIDA, Masahiro)

櫻井 丈 (SAKURAI, Joe)

小野 塚拓造 (ONOZUKA, Takuzou)

山野 貴彦 (YAMANO, Takahiko)

アヴィアム, モルデハイ (AVIAM, Mordechai)